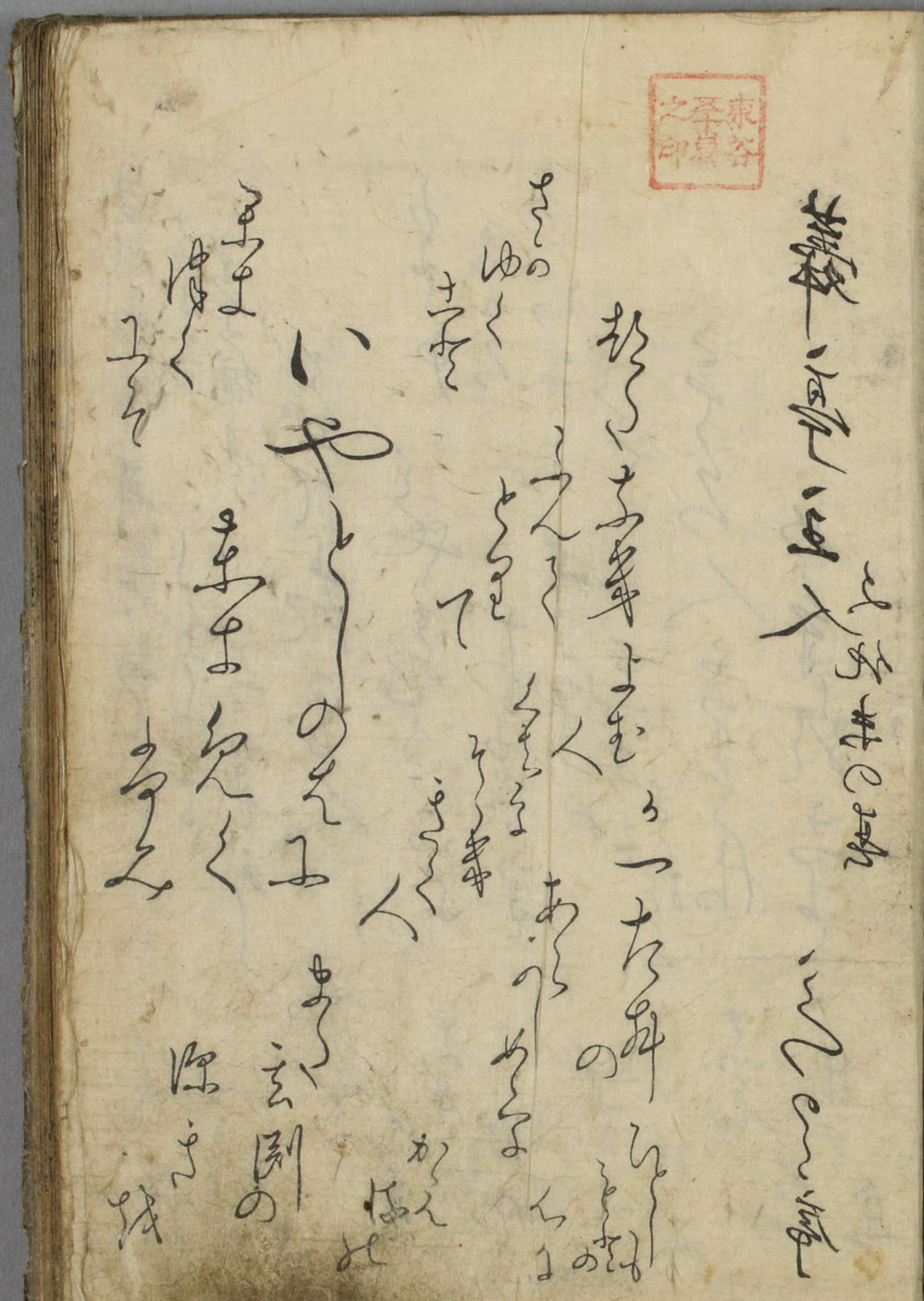
A13
4439
1

A13
4439

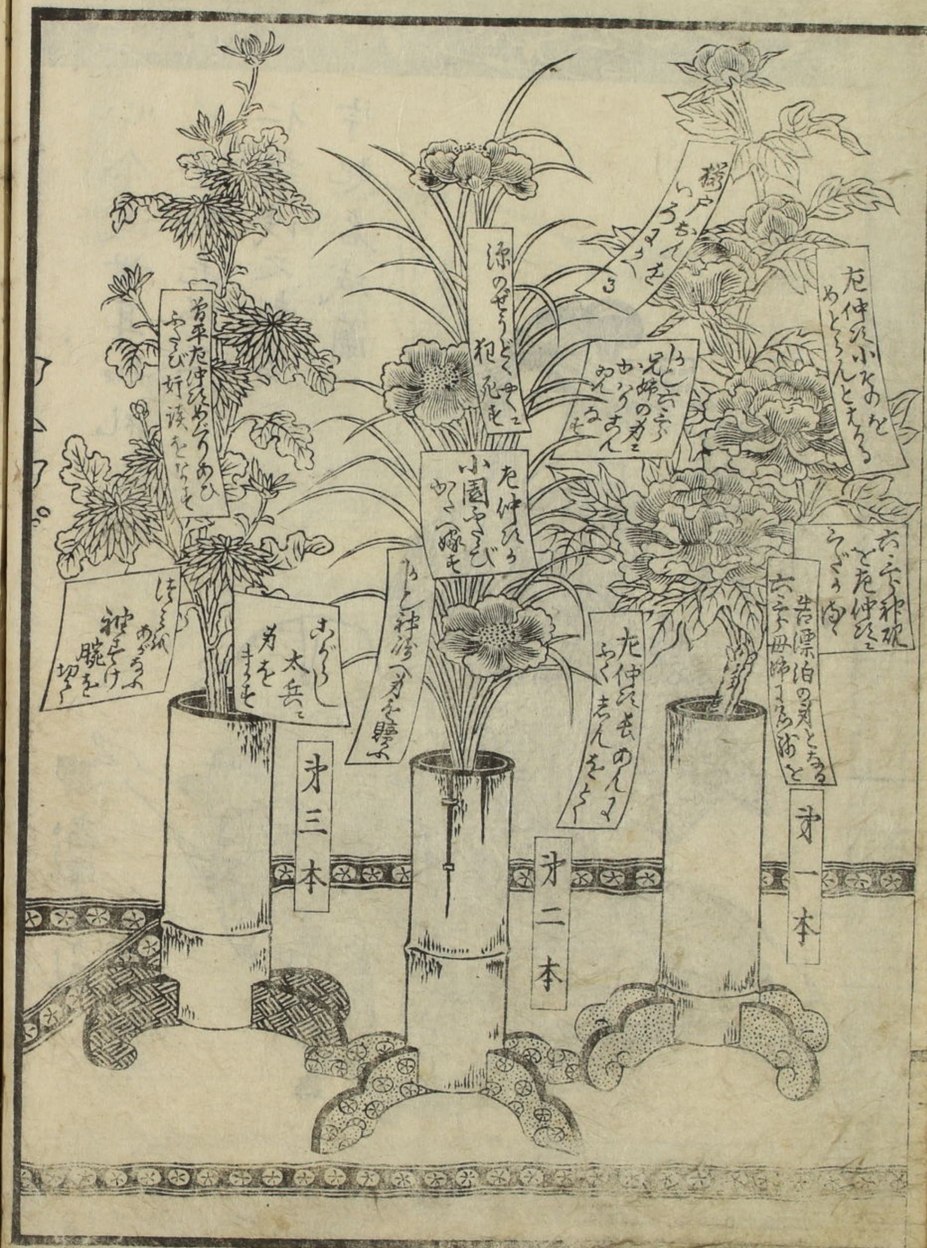

東谷
琴卓
之印

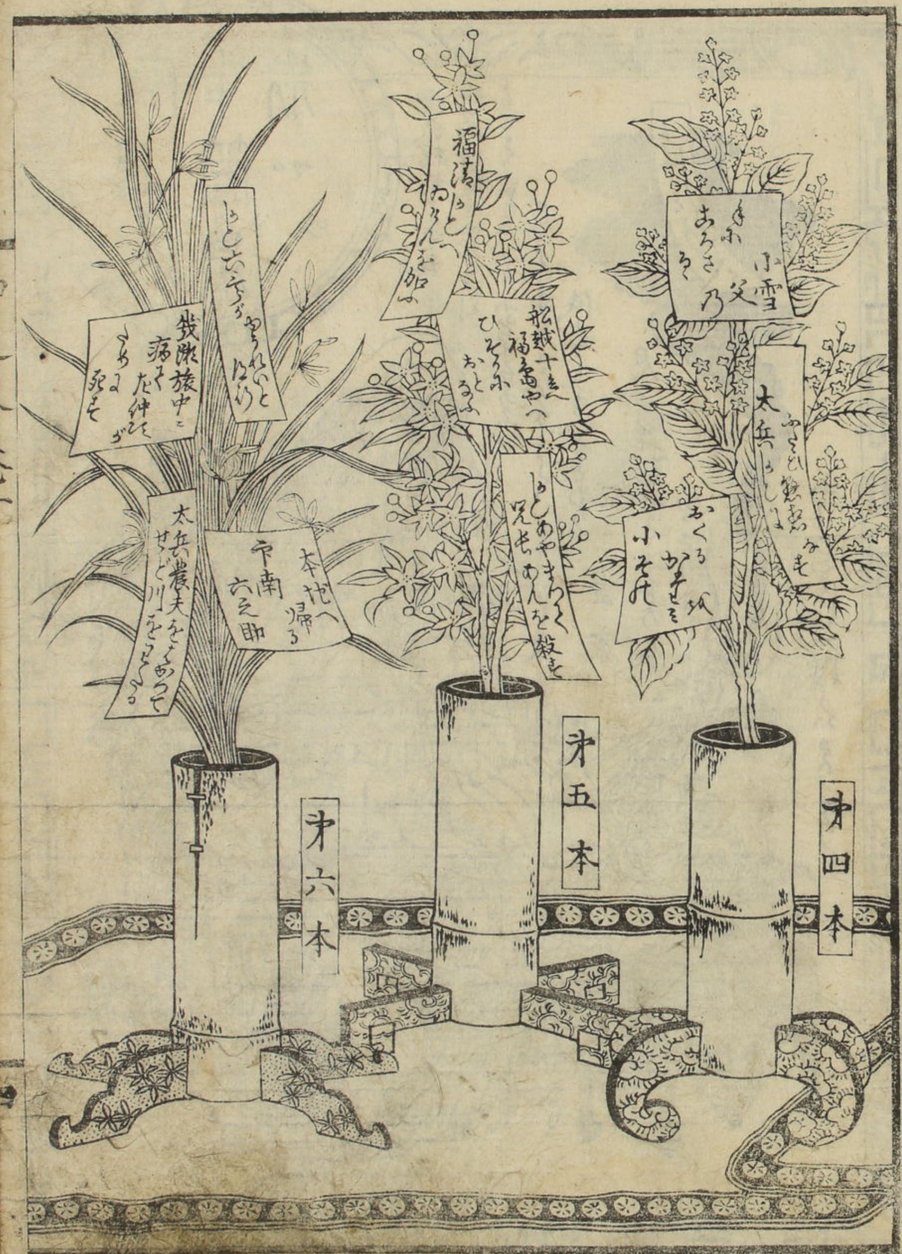
[illegible]

[illegible]

[illegible]

福島屋清兵衛
しゐが兄
茨木長庵
心尓波世耳知礼
之登於毛以之
仁誰洩之都留
宇起名成蘭
神崎の傾城
高津家の臣
印南六三郎


才一本
才二本
才三本


才四本
才五本
才六本

源氏稚姫の巻云
姫君御祝と喪うり
ようちくも宮内ふ宮手せあふと
是まを手分さろうとく
紙奉りをへくとのり
菅家
ふのやしいはんろうろう

ふのやしむひと
ちとを
世乃中の
つさくのれふも
なちさ
めれふも
印南六三郎奴僕
袖助
高津家の風臣
印南曽平

六三郎姉
小園

秋ちかき桜の歳ふ蟬の声
うとんたちきりや
うきくまんこん

高津家の臣
兎原源之丞

露なんぬ蛍もよるかな
くさのうへこもむの何をか
かきれたるたれく

津ヶ國の任侠
腕の喜三郎

とろうれ
我分も
人のか
とまも
かるる世ふ
ちむ
うきくや
かうし

さゆる夜の
嵐よふく
読うと
むふ
影きく
氷の月哉

常燈

高津家の老臣
印南園右衛門

ときさめしきの
うれ夢ものこ
ときれて又やらこん

高津家の嬖臣
漢部左仲次

秋の夕暮

袖助妻
風

印南六三郎が下部　岡平
後に角觝
白滝次郎八
高津家の忠臣
船越重兵衛

加之久全傳香篭艸巻之一

江東 梅暮里谷峨 著

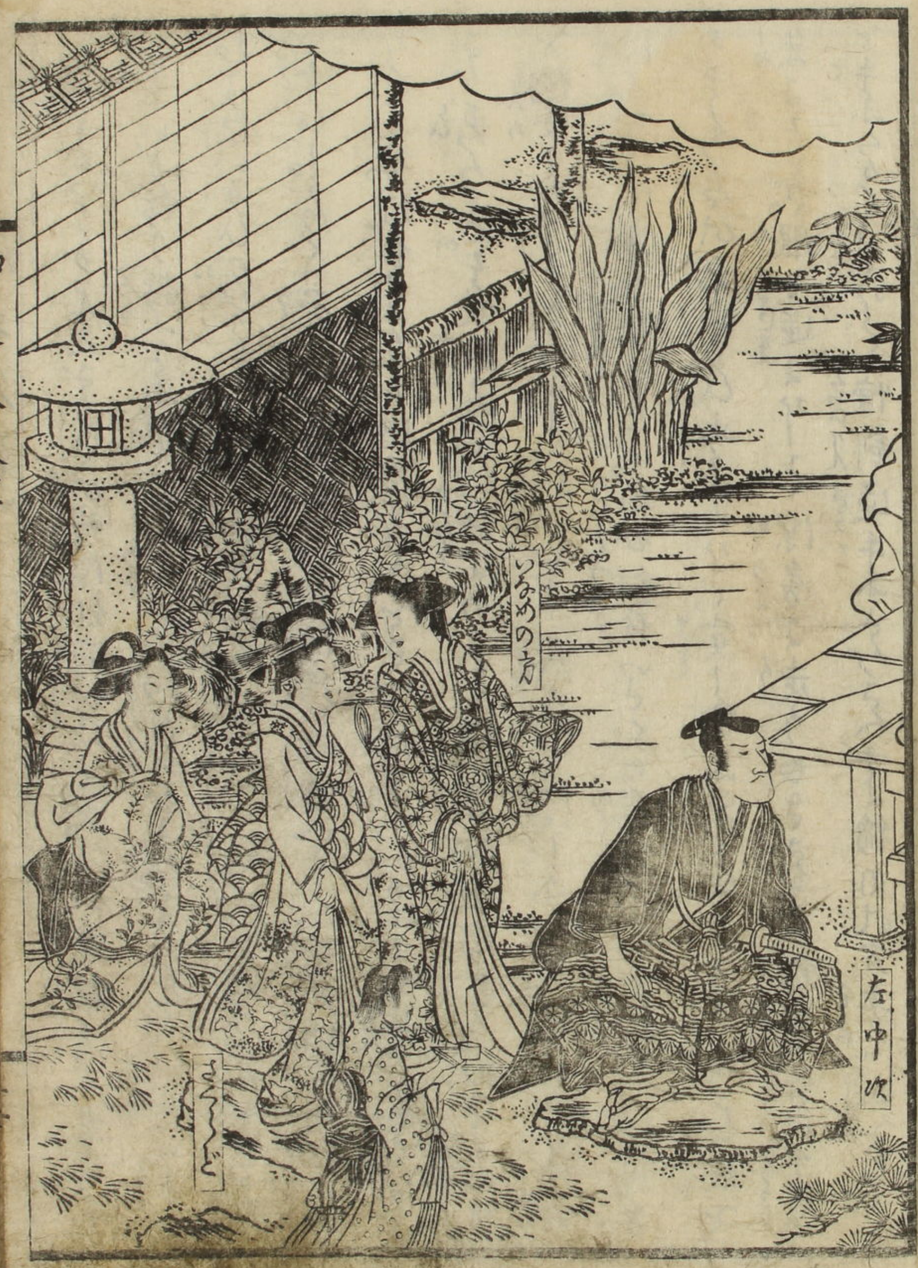
第一 櫻戸恩を色にかゆる段

延元元丙子年より帝王両朝にわかり。天下益さわがしく正成義貞討死の後は。南朝ますます衰へ暦應元戊寅年竟に尊氏草創の武将となり。人皇九十九代後光嚴院の延文のころより。やうやく天下おさまりて。敵形方とかゝる士。尊氏のために或は賞され或は誅されしとき爰に高津新左衛門尉知長とて。仁徳帝に奉仕し。道豊臣の裔にして原摂津国なる住に住ゐしかば高津と號る。故ありて中頃摂津を領し。因て法美なり。知長につゞきて代々遠地を領せし前に両朝の手にやまされど。知長も出馬なくてきかかひなりし。病るとおもひえき

たりむなしく養生なりと。天下静謐と倶よりもひいへれば。直地まづら
鎌倉（かまくら）。尊氏（たかうぢ）よ病（やまい）る仔細（しさい）つぐ〳〵ふとき。運（うん）と両端（りやうたん）よりつぐるの赤仏
とめしれば。尊氏（たかうぢ）もそれ二心（ふたこころ）ちき氏（うぢ）さろ。本領（ほんりやう）安堵（あんど）の免状（めんじやう）とはるもせば
高津（たかつ）の家いよ〳〵かく富栄（とみさか）ふ。他人（ひと）称（しやう）〳〵法義（ほうぎ）の長者（ちやうじや）と呼（よび）素（もと）ろ
知長屋（ちながやうど）あるのれなりとぶ。夫（をつと）よはる妻稲日（つまいなび）の方（かた）やさ〳〵人（ひと）とのいと
むよかろ。ちき。中ふも婢（はしため）桜戸（さくらど）といつれれ。そろ。ちきれそそ。つぐ完
愛（あい）といへど。仏（ほとけ）かきけまバ。きの引言（ひきこと）ひく。教訓（きやうくん）なるこびくく。
桜戸（さくらど）いれ。むるや稲日（いなび）の方（かた）かろよろく。戻（もど）ちぐふいつれ。桜（さくら）ちき
ちぐえれ花（はな）と千（せん）ろんとなとふ似（に）く。ちんざる恋（こい）ろ者（もの）ちりはれども。
いるれ因果（いんが）のむひふくあろけん。相公（あいこう）を偶（たぐ）ちもひそ〳〵ろ。おくれ
ちろの日ふかさろ。朝（あさ）よりひとぐまろ。てもちれ夕（ゆふ）ろ。やきれ妹脊（いもせ）の

中（なか）をとさまろう。かく言（いう）もかくと桜戸（さくらど）と十日一夜（とをかいちや）。せちくろ。
さもとけもづりのふろう。嬉（うれ）〳〵夜（よる）どのそひぶ〳〵きせそよしとなけくふぞ。
ちひちく。れ願夏（ねがひなつ）の稲日（いなび）の方（かた）も一（ひと）びろ怒（いか）り。二（ふた）びろ女子（をなご）のちろう
性（せい）氏白地（しやうじしろ）よりとのろ。ぼしろ人（ひと）も七帝八帝（しちていはちてい）。きれくろだ〳〵ちろれ迷（まよ）ひ。
誰（たれ）ふもあるべきろ。桜戸（さくらど）ぐろとかろざる熱想（ねつさう）の抗意（こうい）と。相公（あいこう）へ手（て）ふ小告（こつげ）
の人（ひと）。知長屋氏（ちながやうどうじ）換（かへ）ど。常（つね）ふかろ中（なか）き桜戸（さくらど）と。吹挙（すいきよ）なせれ乃男（のをとこ）ぐろえ
かろき計（はか）ひろと。側女（そばめ）のろちちひもろどとのりれば。稲日（いなび）の方（かた）もつぐ
せん。れだ〳〵桜戸（さくらど）よひきけるべかろ人（ひと）く愛（あい）のあろんも仮（かり）ろ。とざま
ろざまちのひやぐらしのひろ。桜戸（さくらど）ろふへ所（ところ）のかちるろめとい妹（いもうと）き
た右のやと。さのふとしろふとそ。拝（はい）りかざるひもなく。ろるせの
なき氏移（うじうつ）ふろ。行（ゆく）ろ恨（うらみ）ろ〳〵ろ。憤怒（ふんど）よりもれ胸（むね）の火（ひ）さろよ

左仲次
阿陪の丸
とも次郎


いなめの方
左中次
ぎんぶん

ちづまるべくも見えざりき。されば時僕邪左仲次といふ。放逸無道の者ありて。常ふかり侍り諂ふこゝろの心と労せべ。知長の心まことにいとど。稲田の方と心ろいりひ居るとぞ。婢桜戸が相公一無想の始末をきゝ。爰ぞ思ひ為の幸ひとゝろく労しのれめんどなる桜戸が行方いきく。内分相公ふ無想なせども。はもだゝも返答ゝきとゝぶくしくおのふるや。是なんてなるざる恋ゝとそれ故ゝゝれ傍よめゝく相公の心とゝゝ。かくゝ内分を側女となるゝきゝ心ゝく。折しく其夜と夜一の人ども。稲田の方嫉妬ふく。おのくまゝ憐めとど。内心剣成つゞくの悪婦よおそれの人べ。稲田方あるゝゝゝ出おのひ出るべーなど。実しゝふゝゝ成ゝくと。桜戸が顔と朱よゝゝぞ。服と逆よなゝく深房よ走ゝ。もきゝふ稲田の方れ黒髪を手ふるくとかゝゝ。懐剣逆手ふゝゝ。ゝよ稲田れ方妾が耻とゝく

義理成かき顔ゝるゝ相公ゝ告ぎるのゝなゝど。嫉妬よ魔ぞる面まし。今ゝんゝや妾ゝゝゝゝちのひ出ゝせんと。咽りと用ひ突白及右ゝゝゝ。ゝ孫ゝゝゝ出ゝゝく手ふ其所ゝ高位代ゝの家士おゝゝれ中よ。印南園右ゝ兎原孫五兵衛の相法深殿のれさんじきゝちゝよ走ゝ。桜戸が行状とゝく怒ゝれ園右ゝゝ桜戸と後ゝ無手とゝ。孫五ゝ桜戸がゝゝ白及を打ゝ。ゝ方とゝゝく隠とゝと。其間よ稲田の方ゝ辛ゝく逃れゝぬゝや心ゝと。ゝゝ孫五ゝ手よゝゝ白及ゝく桜戸とゝさと利。桜戸痛ゝゝゝ。両の袂を両手よ振ゝ。僕地と白眼ゝゝゝゝゝゝの稲田の方。無情の二人れ前人よ恨ゝれゝゝれゝゝきめゝ。魂魄這出よゝゝゝゝ子孫ゝゝく恨ゝゝゝゝゝゝ

宮城の一念る生とひくくしい。汝がかもるまゝ不恨むべし。主君はもあなどて方
とつゝべきやとぞあれ。二人ら顔と見合て涙をくとさめ。同じ下れ女
なるとゝむがくちひなる。非命る死れたゞりるめゝど。訪ふべきもの
もなく。ろう其家退散なもぶせ。ゝくれ訪ひ弔ひと念頃よなとべー。孫
五郎ら なゝぐるられ園ら実るむべと。れなく葬式といゝるゝ。
孫五郎夫婦ら。偶とかゞれ。ゝちうゆもひおり。幼き両子をのこし。
無常れかゞるさゝと。夫婦同年月日るめへなく。世を死去ぬ

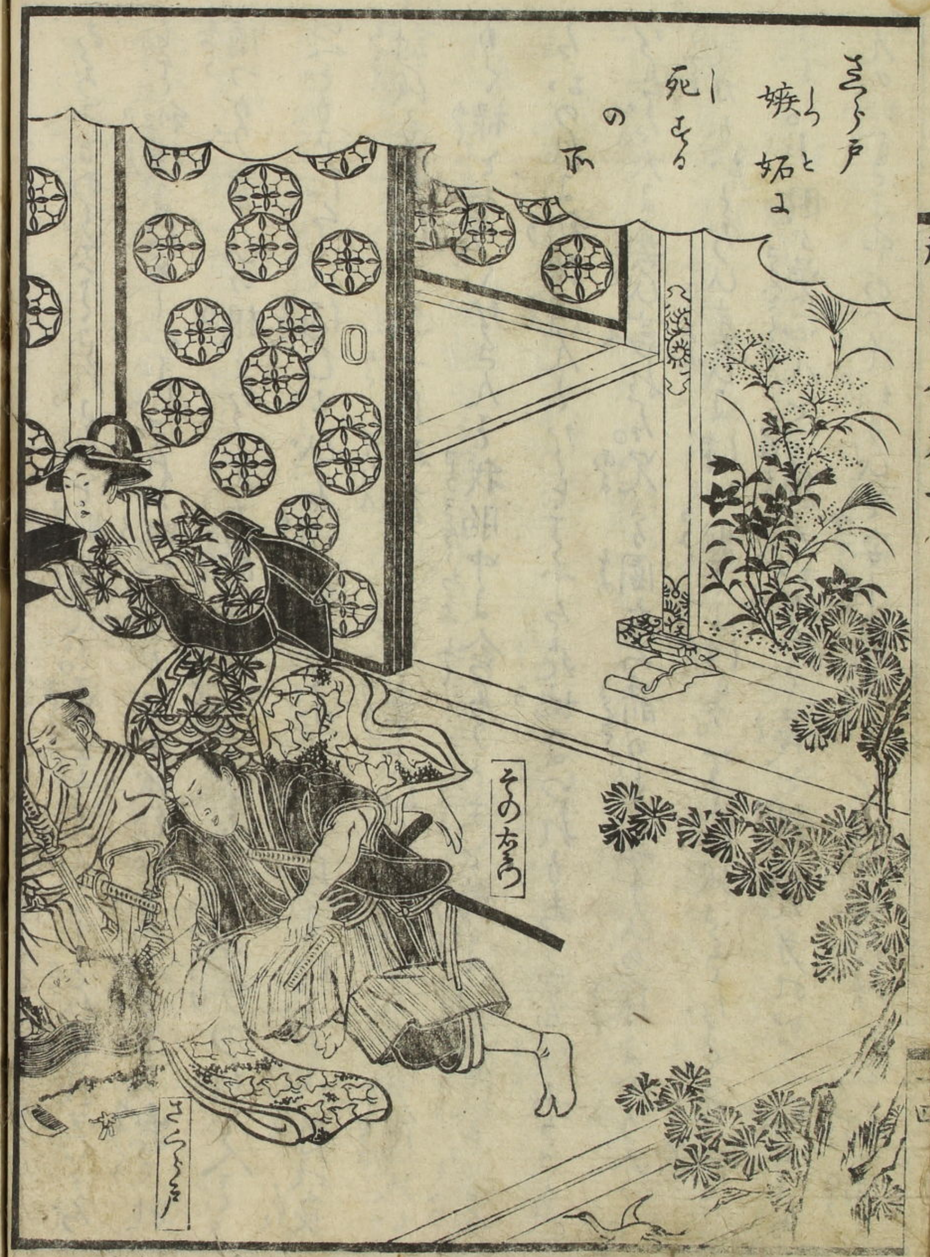
第二　左仲次小園を娶んとする段

明光なれのごく。金馬玉兎のあゝるめ。ろう十年れ星霜とまえ。兎糸
孫五郎が一子孫ら。おさなきろう父母るおくれ家督と。ひとりて
危後と勉ふ。世裏なれば知長の公るかなひ。その交る所古人のごゞとあり

と一藩るも是を称ど。又存命あるゝ。卯月園右ゝが阿娘小園と言ふ。のと
ど。二十るもゝされい要ゝと延ばるゝ。孫ゝ兄ゝよ一位の妹女ありく。末の
女子なるべ父母名ゝくしく年ぶ。ゝや破れの年れ蒼れゝゝ。眉ら月
よ仕くいと連婿ら。一藩るも左ふれおゝれど。ひるそよざる者のゝなれど
諸ゝどど。かゝるゝ兄弟中もゝゝとぬ。実る孫ゝ兄ゝが孫ゝちなるむ
卯月園右ゝら。齢はゝ歳ゝ。おゝゝく痛ゝゝ。ゝ無べき
とも見へど。されども子両位ありく。姉小園ゝさきゝ孫ゝ孫ゝとゝび
ち。弟ゝ六ゝ二郎とく兄弟男女れるかちあるゝ。容顔美麗のゝなゝど。怜利
復明孝あり信あれば父母両子といとり。むとめさゝゝど。今ゝ死ゝ生悔ゝ
ざれと。唯漢郎左仲次の浪賊巧言巧あり。桐ゝとゝどゝのゝとめゝどと
踈ゝゝ。あれいさてなき知長ら。いゝるゝふや常れひる怪氣なく。腹ゝの疾と

なるべき左仲次とおたがいをまなさんと。愛さること尋常ならず。下ゟ異なり。
風も虎の威をかりひらかれだ心慢心。恣ゟ悪威とふるひ。おのれゟ隙ゟ
ゟれ人讒言あるべ聞ゟれるの其教をまたくど。四道なきと人ゟ捨ゟ。
つくさもようさも智あると思なるも。よろづゟ踈ゟ彼ゟ言ゟ推辞
む。不実ゟ住ふれと心ゟ愁るの。左仲次ゟ鄙吝なる人衆ゟ恥ぬ。
女子ゟ人ゟ金銀ゟ財のごとくなき色ゟ。小園ゟ容貌の殊き
ゟ。歴年ゟ人と集ゟ。宅原ゟ恵と作伐と因ゟ歩む。むなく
月日ゟ人ゟ。なふとぞ法討ゟ隨人ものとぞ心ゟ
き友人ゟ類ゟ集ふのなるゟ。因ゟ左ゟ血枝ゟ南晉平ゟ水奥のまどゟ。
晉平ゟ常ゟ左仲次ゟ。ゟ〻ゟ蒲ひる。一日左仲次晉平ゟ。
并ゟ姪女小園世ゟ。たびまれなる美人なれ。左下ふるく勢想ゟ

ゟふもあるぞ。これと恥見れど。勇士も美人ゟ。軍ゟ。
ゟ和漢ゟ。ゟ。恥べきゟ。ゟもなき人心ゟ。
情ゟ人ゟ根ゟ人ゟ思ゟ。小園ゟ恵ゟ言ゟ人ゟ
ゟ。ゟ人ゟ。ゟ内證ゟ。ゟ人ゟ良
討ゟ。ゟ。ゟ破詰ゟ。ゟ妻ゟ。ゟ席ゟ
ゟ禄ゟ人ゟ我胸中ゟ。ゟ。ゟ主ゟ。ゟ記ゟ。晉平
ゟ利ゟ得人ゟ。ゟ。ゟ地ゟ。ゟ欲ゟ
ゟ。大ゟ喜ゟ言ゟ。ゟ園ゟ前ゟ。ゟ床ゟ
ゟ力ゟ。ゟ喜ゟ。ゟ悲ゟ。ゟ。
ゟ。小園ゟ栄ゟ人ゟ義ゟ鉄ゟ。ゟ嫁ゟ
人ゟ。ゟ。ゟ。ゟ。左仲次ゟ扇ゟ


そのかたわら
さくらべ

源五べゑ
いとのめの方

曾平氏のすぎ。もんそ一番帯めるべきもれしと文アのつうせーふたーて英ぶ
なりと称ぶ。酒肴氏のく食應なねぬ

第三　ちし六三郎兄妹の名付り婚姻ゆを段

斯く印南曾平々た仲次ゲ家とさう。兄園右ちゅかく（やき。兄のキてべる
坐。ゆキひの容姿も同ゆんとさせどーく。喜ぶちむることあうとて。た仲ぶ
言氏ちゅく細ゆふ告げ。称ぶひてもなき賀が。年く添ふ出が方氏変改
なーた仲次へ嫁せーめの人黄泉へちゅき殿族の為たくれかくまれあとに
のちれ小園ゆ幸ひ六三郎が為れるち。二ゆ々當家ちく彼が右へいづれ
者ちき婚ゆなる旦ぶ。這変固辞のぐ祝ひ塔的ゆあるべきく述ちゆね
園右ちなぐきゆキひゆ氣力ゆ衰ひ耳妨ーく回返ゆなくほしが。何ちゆひ
けんなりきまちて氏卿くのたげ。起さキふ曾平ゲ苦くょちうはさのけてひき

倒ー。ありのふれどーく連ゆなくき。己ゲひ心ゆなくく人一塔契ゆなせー保ぶ。家
利のたち返稽なくとべき在下とおもふゆ。人ゆあるべきゆ毒悪無道の左仲次。
ゆれ快氣なくとぶ永く活とべきゆれなくど。己ゲ心れ邪氏。亡父母の不仁なる
子れいとぶ伎なく。行末れちひち教ゆとぶ。ゆぶなき跡ゆあるくぶ他家と相續
させ。家と亡ゆとあくぶゆ黄泉のさちゆちうと。父の厚き遺言ゆ別家
と做変汝ゆちく知る所。彷骨碑ゆーく忠とくくんとゆさせど。左仲次へ
のく阿陪変居住の礼ちゆく。邪ゆくゆ一塔利潤ゆれとゆ。何ぶ天
道のゆれーのふべきやと。侯ゆむせび教訓なくと。曾平々兄園右ちゆ令あ
れちゆ々変のなくざち氏知ー。再びれいちどは鞠ーかちぬ。園右ちゆ涙と
なくひ。妻我瀬娘小園と行方ゆ招き。這上ゆ々彼ホいづれを氏工んも計り
ぶくー。時とゆひ折とゆひ。兎原源之亟ゆやゆひゆおくれ居ぶ。婚姻も

延しぞ。月ゝ災ひ絶えまなく医療をさけんもぐふ医療氏つくゝと直中に
姻執急んもよろなり。兎や角やせんと心を痛めゝとて。妻武蔵国右
衛門ぐ心とおもひもどしつゝふ打仰せのふちゝとときふ計ひてんと連くよ
ちうけ。やゞく涼ゝ恵方へ窓よ出き。對面なりくまちゝぐれ緑故もれなくめ
ア。せちく名のゝ婚姻とくの〳〵災を避くゝ氏たのゝ言氏。涼ゝ恵方へ良
考心今も知ぎる病兼れ婚姻とちとべき月ふもめゝぐ。まちのゝなちぐ
所論法べき病ふもなく。仮ふも祝言の盃を執合ゞゝく因もあつく盛
よ至ゝざる月と看く埋木となんの便なく。又良計もめゝんと心思ひ
ふちちく諾へが戦慄大よ喜びまゆくも夫よ告氏吉見えゝむべく余
粧もなく。一日二見とぎ。小園とおく新。涼ゝ恵もめゝく涼き粧をちひ。
妹女ちと男子よつちゝれよ代や仮の祝言氏なゝゝちんとまゝんだ。

常見ゝれとちゝ涼ゝ恵と見まゞふちれ義少年ゝゝ見えぬ小園ハ帽子
ふ涼よ被ゝ婚姻式もおちゝ閨房へ入る。ちゝ兄の屋さん心と詰ゝんとちふ
ときゝ小園ハ帽子かいやちとまれと見れゝ小園ゝふめちく六三郎ゝ不意ぞ
互ふおどろき。ちし心と用ハ言ちゝ。兄涼ゝ恵病ひ治ゝがたき氏知ゝ小園さん
と切木よなゝんと愁ひ。ちゝふとかく男子れ姿よ涼ちゝ。兄のかちちれ祝言
後なきゞ名のゝぐかちの伝むちび。先ちれ涼ちゝぐよへも再緑なちれれ
是と不美ちもん小園さんとめんちゝ計ひなれ。さゝい一這れ次斎打瓶の
ちゞかゝさちと。ちとなゝ涼れちんゞぐも。涼通の名氏差ひゝ心も絶世の義少
年ちひ仮ふも二世のかたちちもちゞ。妻ち夫ちゝや心も変ゝちちけちく
見えちゝ。六三郎ち心よ涼く聖いちれ。在下れ姉小園よ代ゝ緑故ちゝ。
の兄れのちちゝ涼きふたちゞぐちゝ。尾よ玉れたゞひゝ。ゝれ母ちゝ便よ愧べき

る。姉小園殿先妻の腹なれども異なる子ども。幼きより守育寵愛我
より増ぬ。婦人の義よかるまじきもの。子より嫡男を園右衛門と名付く
母これを密まねき。左仲次が無道を避んなりまぐれ婚姻を急げ
と。奪とたのえる係を以て大病なりと偽り金入くもぬたく若くなりとも婦
婦となるべきれ便なり。道ちがねるなぐるなる討へとられ告まき。
あれおぎ始末の面目なしと恥入らしめ乱れ切
符の合せ長よ等しい所為なる不祥とはふがるれ幸と。四方八方共結
ら跡先となるべく無破とめ。悪縁をむすび災ひを生ぜれ根とな
なるべき。小園が當難をさけしなるぬ園右衛門甚悦よむたやく
病ひなり。竟よ泉下れ使をけしく。朝れ使もきえうせぬ

第四　六三郎神祝を左仲次より殺す段

ろしく六三郎へ。姉兄の身よ代て。仮りよ祝言の式結びよ
ものとり。一夜の契を以こめ始末。悪夏壁を傳ふのるひ。雖
いへともなり。千名ならば。何とるく源々逃ぶ預ひるく。令園
稲目の方の侍女となるぬ。六三郎も園右衛門。死後の家督
と踐へ扈従を勧む。をりるく避逃しよ出合ふれる。
互ひよあるるまり。何とやん云ねるざるの形勢を。左仲次
も情るとへども。已を以ちるざる悪昧なれば。せえるしし
るると従んりのとなるなりし。折ち人集るれ而るるく。
と出合をりよと矢をあるひ身をつるひ。るくるのく口説
を。るしく回答えるるる。彼西へ走り此方へ逃るを。追ひ
つまるるるを。肩を同るる。勧る。舟越重兵衛先

六ろう
偽りの誓紙
禍ひをうけ
悪縁を
むすぶの所

と
六ろう

より左仲次が行狀を見て。心おくしおもひるがゝしう雖
を避んと紙門をとぢ隔て。然と面を正し。
やはらぎはたらを為ども。左仲次と二人の席より居る
ゝハ不義を言ん。男よりおがえるるゝハ。早く退べし
あうざれば男の爲より情の刻より魅くり来る
れ。しと。男ん左仲次が袖を靹とゝく。
男らの所を退くゝも退ども。主ある女子よもあらハ。不義を
いべるゝ。互ひよ妻る夫る。鰥寡の男。しゝ承ハべ
相へ願ひく妻とるんとおりえる在下。隔るあん男ハ何の
事ぞや。重兵衛偽りいるゝ。あん男ゝゝやしハるゝ云
号の妻るゝ。此上摂るるあらべ。その侵ハ無ぐ〜

と怒りの面より得の左仲次。當惑る。皆く爰を立退りぬ
何れ小園らしくの隨ぐる。源ゝ丞六上郎がるゝ〜と爰
が。妨けとるの二人。左右憎ゝ。何ぐみ罪よるいれんと
ユゝ。あるよ。爰よ高伴家よ一ッの奇れ硯ありく。常よ
宝藏よ秘めおれぬ。吉夏ある毎よ。此硯を出し見るよ。硯の
海側よ。その些れ水をるく和哥を詠ぶ。住吉の
神へ棒るを故例とゝ。又宿願あるとれハ。その硯よて願ふ
をゝゝ。もゝ。果しくあるよるぶといをる。どの
硯り稲荷の方の腹よ男子出生ありく。産後のるやと
より子ゝるゝ。然傷ある。どゝ。母継の男子よるゝのあ
べゝれと紹長ゝゝ宝義より硯を出るよ。いるる荒ら奇

硯洞ひえぞれど。紐長不審なる人気色なく。礼を厚く
し。床の正面へうぐう。和尊を縋ん紙なりい。ちぐ〳〵言
役印南六三郎よ守〳〵せ。奥深く入りる。漢部左仲次ち時に
到来せうと云ひ。左右を見回りと。六三郎が兵方へ
より。密をいくるいつを相云の籠よ頼う。何るも公の役る
ざるいるりと云も。初なれ職のかつく空硯を拝るを
をとど。ん分近臣の威光をりく。内見を免をゆるれやと
面よ悪鬼を解し連〳〵よ乞ひ口統。六三郎家如を見ど俗
利るれば。紙なれ左仲次が光景と。詞を正く。ちう
居るれ〳〵と拝見いさそなれ。一ト間へぐ入るる紙許
るへど。代見るるざるいん分もちる有よあるとる。更よ

兼引ど。左仲次呵〳〵と笑ひ。余人ちちど。在下内見は。
後よ奉彩〳〵とも。あえく〳〵ん分を咎めるよすく。ち〳〵く
紀律をるひ責るるるもあるべ。ちれ頼るよ内見をとるる
をるひ上るべ。必て分るるよすむべ。紙安んぜよと。主の
紙推し量るる量通の詞よ。回答るるべるる。恐れ
と〳〵居ける。左仲次ちいく巧言よ。六三郎が脅を
るど。ん分せすれ公よりへ。當惑もちる。ちは一ッの深
念ある。ん分目を些〳〵れるち閉るべ。その内見るる
ん。さればん分の怠る罪もるく。ちが望をも足る。ちぐく
ねぐる居るぐ〳〵と言つ。はと行く床よかざりある所乃奇
硯を手携んとるる紙。六三郎慌く止め爭人拓子。左仲

次き手より誤うる光景よ取り落すべ。何んぞ左仲次い六三郎よ跡をあぐり。べき。硯き微塵よ碎てぐり。左仲次い六三郎い今更言訳く鼠の孫るぞくいづらく迯げ去りり。六三郎い今更言訳くべき詞もるく。元係よ手をうけ。既よ腹へ突きんとるるに時。うしくあつて去りつ死出る代突退け。面を正し。かくる席へ出牙まるく人目よ掛らべ。罪よ罪をくさぬる道理。未予退けるやと気を焦燥しへあるまざるありひよ位卧し。ふく災難を受りへも。原好色深死左仲次るまべ又くんが一族よ仇なるとるがえぬ。後令罪よへくい重ぬるとるるどて止めぞよあるべきぞと。手よ携く。放まべくもえぞり家。未予硯の破まるとと何りの未予告るん。彩左衛尉

紀長左仲次を將く。周章く走りいで。扇をりく六三郎を丁ることうち。汝神硯を守る役を怠り。碎き縁故侍ぐい。よ吐べしと責めるくべ。死をりく罪を贖んと。ちく短刀よ手をかくる。その手を紀長自ぐ。ほ細を言ひんとまく。罪の免まざるを量く死まんとるるい何るぞ。さぐりの狼狽る汝よ又りの代めるまるい危くんと。抑ぞとり。怒の中の情厚きる感侠を流し。はくしくるる相乙の賢察のぞく祥よ言い説とる罪の通まへ死きるけ出べ。潔く死てんりのと。思慮浅く快炎く不念とく。神硯を碎死く始末を白地よ述ぬ。紀長眼を閉ぢりのいるぞ。左仲次まあぞ笑ひ。六三郎ぞい武士よ

仰気なれ穢汚れ給はれ。つぶ名を出し罪科に逃れんと
るのもとも全るべし。縱令在下理不尽を為とも。何とて
あんず八止めざるや。這席よりあるざる在下。その神祝を砕れ
るもせよ。つぶ罪へかくあんず八死刑を逃れ遁れ不能
遺恨らくべれおぼえるれよ。雷だりもちぶ[illegible]
罪をあづんとれ八のくるくさまや。未練あぞ仕是。ゑくい
證拠あるべ生ぐーと責む。六三郎一言の返答なしと。
しい恨しげよ左仲次をうち絲む。左仲次仰て熟し。
六三郎を刎るさまよいで腹あるし。ゆゆし汝るよ忘
れ紙自眼るぞ。七寸より男女一席よりる坐るる紙
禁ざるよ。注と笑をくいるる六三郎へ。依通乃罪も

重ねまべ軽らざる罪人なれど。朋友の信を尽る。自殺乃
る紙ねひ沼さぜんとく。切腹の辞しを憐まるひ。
を蔭まども紅長曾て肯ぐ。六三郎を后方よ尽て。
ゆ克別けよ。此宝硯八往時昌恭の左大臣時平の臭
祖鎌子の連。住吉の神祠よ請願る。一七日の夢よ鎌子
神託あるて曰く。ゆまるの地よ止めより以降。義星霜う
るよ到る者あ毎しとくど。いまま曾てその紙実汝ぢが
如き者を見ど。今汝を紙くるまを是を喜びとるるて形ん。
あよ一ッの硯をもるく是を附与へ。汝り官よ進る位よ
昇る毎よ。乃着之と託畢て爰覚む。鎌子の左の袖を
見るよ。一ッの硯あり。家よ帰る宝とて傳くく時平が孫時

とものぶ
左仲次

六三郎
ものの
硯を碎き
切腹
をしたるの示
六三郎
ものの

朝よりおとづれしその人。大中大夫橘善根の子仲太と
言るもの。時朝よりよ。時朝官爵を拜任するのあれ毎
よ出しーんる。仲太の硯を視んとを願くども免さど。時
朝よ子あり。齢十家る。仲太是を咬ー。時朝外へ出
るはをうんひ。傍よ筥を拔れてくんるる。是外よ笑へる
るのあり。仲太おどろき時朝の帰りを待てあるく
筥の中へ入れんとて。誤て落る硯砕けて二つとなる。
仲太大よりおそれいんとものぐるく。時朝が子仲太よ
謂て曰く汝殘くるのるれ。父よ告るよるが破をろこ
とせば。必を深く罪をすべと。言畢ざるよ時朝家よ
くる。硯の破をるを見てるれ。所由を問よ。児自ら

その為を不知いん。時朝怒り
せ。今汝よ逮びをを知破るん何ぞやと。竟よ幼子の頸を
刎る。仲太大よ悲を俗を棄僧となりく。若幼殊よ殤
まる。功做て一條の院の永延二戊子年初て播磨書写山の
円教寺へひらきをる。姓空上人をるり。その侍神呪を
藏をる。その後いろ地をるり一ッの小蛇をりて。その硯を穿む。
るるり数扁をりしが。いつとるく呪愈く依舊とるる。ろ
の頃いるるるるよりるが家よ傳りり宝とるをよ。ふたび
汝宝呪を破るの罪をるべ。死罪免をるをるといくども。
呪愈る後を時朝るるが子の頸を刎よるる知後悔る色
よ知仲人哭く。いつへの忠太よるるるるる。僧ともるるるる

べきものゝ人が色情よりあがり汝出家得脱なりひもあらざれば。慈悲なく罪を重ぬるに似たり。是深念あれば。權〻罪を免し。主従の因を断べし。未世といへども神祇えのごとく愈るをあらべ。帰り来る幸ひもあらんと。一封を懐中より出し。これ紙こめし一書國を立退く後に封切あらんべしと教訓する。六三郎何の有と言ことを聞もくゞまで。涙とうるに押戴き。懐よりさあ退出る。

第五　六三郎母姉に名残を告漂泊の別とする段

印南六三郎ハ。こゝを出へ帰り普代の奴僕袖助といふる者と母へ附べきこゝあ残しおれ。其余き者のこゝの荒細標と告げ。夫〻に黄金をあたへ。こゝを紙遺しる中に。岡平と

いふる新糸の奴僕。さめぐと泣。良あるく六三郎に云へ。紙ゆゑ紙主人の言。一日ありと主従とるの縁落ゝ。盛榮の時ハ楽しをを同じくるり。今衰へ流浪るの紙余所よりえるとるの生あるものあるべきぞ。彼黄金と賜る紙ちびうくるさべくりの賤しれるのみもあるべ。下官が紙憐をもの人るゝ。何処の果へもん供るさべ。死を悔ひるゝんと赤紙うちあけ願をを。六三郎を宥めゝ。汝がその厚紙を破るも本意るゝ。ども。いづ地を定めぬ旅の空。一位の者ゝ世渡る業ゝゝ。ゝ紙えるく。ゝ連るとも撫育の覚期もあるべ。さめぐりの人時節をさべ同ゝ。岡平恨め気。

袖助ハ古参なる丈ケ実義あり。とく留めかゝる。されハ主
参ハ主ハ仕へる丈ケ一ツ。るどて
形ハ古のあるべきぞ。分衛とるりても雑ひ中ハ
るもの仇なる丈ケ。ちゞ形ひの似ざるとれハ別人ハ逢んも
面目なるとゝ。りひ変さる分野ハ。六三郎声をケ。中ハ早誤る。
さまぐ一図を見る上ハ。今ハ丈ケハ任さべしと。兎しの一声吹く
ハ器平ハ。三郎九作のよろこびあく。俱ハ旅の綢度を
そのく。六三郎ハ姉聟鬼原源之丞が方へ来る。潟ろ
母姉を尼方へまねき。ちゞぐの子ケと世るくうちあけ。袖
助ハ実義あるもの也。母人ハ仕ケ中ハ逢る。られハく
主君の射書をもつく。密ハ暴るるもあ丈。再び汝参ハ

中ぞハ母人のもんなのうく。ようれハ雑音ハ待るり。源之丞
寄くハ仔細を演ぐ。別丈を告るが若くハ病ひもりりや
せんと安ゝぞ。姉人ハいひもけば。ようれをりるもちゝの別
を告くハゝと口ハいひど今別丈ハ逢人ハ べるもあ
ざれバと。乱る丈ケ押ちゞめ。二個ハあるハ丈ぬ別丈や
と声ハ泣伏せり。源之丞ハ中えるべあくんと。袂を
咬ちめるげくあぞ。六三郎もるるげ名残のさるとるぐ。二住
の丈ケ助ハんとく。中母ハく姉人。源之丞所くの病者も月を
重ね日を歴ハ。全快もあるべけ丈ハ。るゞれハ看病もるの
づと来るべく。ハよハくくるるぐさぞ。兎ハ角世の落命ハ
ちわくへの降くと。女子のもれ丈ハ。神と恨を

六三郎
母姉よ
名ごりと
さぞ
こうあるとの
事
六こう
おう平
いくせ
袖ゆ
小ゑの

身を託ち煩労めくだるみ。棄る神も助ける神も神とぞ名よ家だりも曲まるものあるまじく。己が身の不幸ハ逃れどもとも。母上姉人の正れる神くも。福ひを降しもへべ。此上幾よ残るハ。頼ることハ親族の邪魔ぐちの今ようハ。誰を力とるべ。てんと。心細くも待べんと。己が身のうへの行先ハ定ぬ住居ぞ。安からぬ心ぞ。惑ふ心の何ぞと。母も小園も伺ふ。住さへ隔の暇をひ。六三郎ハ両住を制し。延ばるべ相云へのかれ。月出度首途の笑ひよいをひ。互ひよ吉夏を告べ。住をかくく微笑む顔ハ涙よ流るを。言よ別る代今皆し。待て。よと左右よ。ぞれ母小園。名残ハ尽べと六三郎。心強くも立出る見送る瞳涙よ曇。うげも朗よ。振ふ袖身も見送る身も。并ふよ悲

第六　左仲次長庵よ腹ふの流く段

鬼原源ふ亟ふ日ふ中ふ病ひ。起臥も自由ぞ。言号の小窓毋然とも。押しく附添ひ看病ぞ。神よ術ア仏よ誓ひ。医療残る而ぞ尽せ。その験ア元ぞ。麦よ茨木長庵とく。原ふ亟ぶ胤異の兄ぞ。搜ぶ国大坂ア住居ぞ。醫を業へども。素より熱せざるく。邪ぞれば。祈をるくぶるものぞ。心を潭き憎ぬ者ぞく。今ハ一位の口腹を艱ふとも尽ぬ。悪ふふよ日を明く送る。この柳原亟ふ大病ぞ紙ぞ。大坂の住居をうちて。因幡の陸

義へくだり。源こ巫ぶに方より附きそひ。看病するうち。
いつとなく印南曾平と隅公なる。浩りあくび。彼が吹挙
みく漢部左仲次が方へ朝暮入り込こ。酒宴など催し。
井こ中みいるうり。左仲次こ長庵が欲ふれを去り。
一日招紀。酒羊酣よおうびく頃。公沢ひきえんとく。あん牙
今大坂より住居するうがり。定めく。妻子眷属ふるべきよ。
這国へ下ア。源こ巫と懇より看病するよ。集ふと有
ぶれこ血ちぶうり。今数ふの黄金をつこ。高禄よありつく
とも。牙源こ巫が病着を見とく。他国るを公まあれべ
ううぶや。長庵呵こと笑ひ。足下不倭ぶ沢あり量り
ありはどや。不倭足下の胸中を察とをいとそ。隨身

るうとと不與気の顔付より見えぬとび。左仲次こ伝ふる
ようこび。されば采金ふく与ふるうば。兄弟とりくども
疎きよるせれや。源こ国へ来りく。牙が病ひ看病
るうと爲よあうび。不きも為命続き。その日を養ふべ
き服ぶみも足くど。妻子るれ牙を僥倖と。この地へ下
ア。表より実きをうぶり。内心腮を動まん爲の食客うり。
牙源こ巫が光景をるる表病ぶく脈や。顔色
常ようも美く。熱気骨より生ぶる。痨瘵とりの
病病るるとび。妓婆扁鵲の名医まりく。いるる美
毋を用ゐるとも治るとあるとるぶど。只容易よ死ぶるを
愁ひとと。死後こ曾平と商義る。小園を姪女より

を賣るものゝるゝべ。美男といひ。年齢も二十余り
ゝゝど。大金を得んとゝるゝよ握りしるゞ。その
ゝく財宝を奪ひ貯へ厚くく。上坂ゝんユゝゝ彼
盗賊の盗窟ゝるゝも。おくゝけきべゝるゝどゝゝんゝく
と。鬼畜よおとゝしを。智恵ありげよ白光よゝくのあゝ
ゝゝゝ。かゝゝの悪根ゝもありかゝゝゝと。得の左仲次
も呆れ果しゞ。曲て密計をゝをふゝゝんとゝよゝゝ。
ゝんゝ月の後義ゝゝゝを攻ゝく。何ゝ包ゝん。源ゝ丞
死後ゝ小園を花女とゝゝんゝ。在下よ娶ゝゝものゝ
ゝゝべ。賞金ゝよゝ任ゝゝべゝゝゝゝん月の手ゝく恥べき
ゝゝゝゞ。小園よ養愚の情ありひ止ゝゝゝ。源ゝ丞方へ

嫁せざる以前。曾平をもく頻よしとくど。園右衛門存命あるうちうるまべ肯はざ。遂よ源之丞方へ嫁しそう。その後ちくく起身の妹女。しるうとみよいまんりの代と。一日ありよけまべ。うが赤紙あると。當下。丹蛾十之衛と いくものすく。言号あるよ紙言て妨ぐ。実之印南六之と依通ると。実ざまべ十之衛が言号とらひくへ傍り。しく六三郎が中を助んまぐよ。これを妨ぐ。夫といもも六三郎が所為と。面憎くおりよう。神祝を砕く。その罪を。ちくく當家を追ひ退け。こうもしとおりよひる。しまく六三郎が跡を慕ひ。亡命ある行衆まべど。人の花と称めまんう。依計よ寄りく。依計をめぐし。

報まんものと。丹蛾十之衛を妻ありと。これを隔てし遺恨の報ひ。相之の面前あるく。厚紙あるく。後言ありもん。相之怒りの顔付あり。ちよ十之衛仮そめるるぬ言号る妻とちんいくど。しく六三郎の依通分明ある紙左仲次郎。武士の恥べきの事一るれが。ほよいまをあるよ女歌を討あんせ。恥辱紙ちくど。再び家よ仕ぐしくく。家を去りしも。彼ホ二人き刀の精とるべき者いよく小園一位よそひつる。ちん別高恩を施しるば源之丞が死を待のまる。出庵ちうよ。足下の發言を謄府へ入まうまべ。ちちくくしあるく。先源之丞が死をまる近よあるど。毒薬をりく。直地よ報まべし。死後之曾平と倶

よしなしごと。足下の令閨とるるぐし。必ず胡乱のことなれ。
去るくも高津家の宝硯人のもるかるよ。六三郎を隔て
入まんまぞよ。うち破りもの人も何ぞや。惜むべき一品なりと
なるべき言ふる紙。左仲次も七庵よさるべ。栄花るるんもの
実の宝硯も嚮よ麓脇。大坂よ住居るもと。弟太兵といへ者
もの。骨董銷を世ふる業とるるべ。兎よく利方るるんと
よるへふる世頼けあれるる。七庵是を感激る。智あり才あり
薇士の器よあるぐと称ー別も硯なりる。

六歌仙

[illegible]